



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

CITATION:

雜報. 天界 1920, 1(1): 11-11

ISSUE DATE:

1920-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159511>

RIGHT:

雜報

●テンペル、百濟彗星 本年五月二

十六日佛蘭理學士百濟教猷氏が京都大學天文臺の七吋望遠鏡でテンペル彗星を發見した。

其の位置は

赤經二二時五五分七 赤緯南四度五三分

こは本邦人の彗星發見として實に第二回である。(第一回は昨年十月二十五日佐々木哲夫氏同じく京都天文臺で發見)百濟氏は直ちに之れを米國ハアヴアド天文臺へ電報したのでハアヴアドでは又早速此の報を印刷に付して全世界の喜聞家に配布した。しかるに不幸にして京都からの電文が誤つて通達せられたと見て印刷文には

赤經二〇時五五分七秒 赤緯南四度五三分

と載せられたため、是を受取つた世界各地の天文臺では赤經二〇時の邊をばかり熱心に捜したけれど、どうしても見付からない。遂に此の發見が何かの間違ひではないかと疑ひ始める者もあつた。

其の後、七月十八日に至り、佛國ニイスのシヤウマセ (Schumasse) 氏が新しい一彗星を發見し、直ちに、之れが本統のテンペル彗

星だと發表したので、前の百濟彗星は全くテンペルではなかつたのだと定めて了ふ者なきあつて、一寸信用に拘り出したが、其の後、間もなくマルセイユのファヌ (Fane) 氏が研究の末、百濟氏の電報は赤經に二時間の誤りがあること見れば、シヤウマセの星さよく一致すると言ひ出し、丁度又此の時ハアヴアドへは百濟君からの書面が到着して電文の誤りであつたことが明かになつた。これで世人の不審がすつかり解けた。分つて見れば何でもないやうだけれど實は左様でない。此の間違ひのため少くとも一ヶ月半の間、特に重要な觀測時機が失せられたことは残念至極である。

●ロツキヤー氏逝く 今年は年初にピケリン (E. C. Pickering) 氏が失ひ、今又英國のロツキヤー (J. H. Lockyer) 氏が死んだこの報に接したのは天體物理學界に於て重く、痛恨事である。ロツキヤー氏は一八三六年英國ラグビーに生れ、故國と佛國とで初等教育を受けた。成人の始め英國軍務省に勤めたが、間もなく、好きな天文學の専門家となつた。最初から天體の物理的研究を開拓し、星や太陽の光を分拆して新發見をなし又新見地を發表したことも多い。早くより流星論と稱す

一種の天體進化説を唱へ、又恒星のスペクトル分類法も獨特なものであつた。更に、日食皆既觀測のため世界各地に遠征すること前後八回、新元素ヘリウムの發見及び太陽紅焰平常觀測法の發明等に成功した。功によつて貴族に列せられたのは一八九六年である。

一生、中、南ケンシントン天文臺を創立して三十六年間自ら其の臺長として重なる活動は此所でやつた。一九一三年此の天文臺が、橋天文臺に合併せらるゝや、氏は新たにヒル天文臺を創設し研究を續けて今日に及んだ。

●十吋望遠鏡新着 去る九月五日、日本最初の反射望遠鏡が京都大學天文臺に到着した。大學では直ちに假の觀測室を作り十月初め据付け、同月十五日夜から山本助教教授が主に變光星を觀測してゐる。

器械の大きさは、對物鏡の直徑十吋、焦點距離五十七吋、構造はニュートン式である。接眼レンズが五個、之れを取り換へる倍率は四十倍から二百倍に進む。獨逸式の据付方で、臺の下に深い穴へ落下して行く重量を齒車で調節して運轉の原動力としてゐる——其の繼續時間四時間。

製造したのは米國ピッツバーク市のアレシヤア會社で、構造上から見れば全く眼視的^{オプティカル}の出來てゐる。十四等星は確かに見ゆる。好い夜には十五等星でも存在が認められるやうな氣がする。行く／＼は寫眞裝置にでもして見たい考へである。(巻頭の寫眞を見よ)